

王であるキリスト

ヨハネ 18・33b-37

2021.11.21 高円寺教会

ジョン・ジュン神父（クラレチアン宣教会）

以前、友達とこんな話しをしたことがあります。人生で一番興奮したことや快感だと思ったことは何か、ということについてです。たくさんの回答がありました。いろいろな意見を出し合いました。成功、親密な間柄、麻薬、ギャンブル、おいしい料理、ゲーム、スポーツ等。中でも一番人間が快感を覚えるのが人をコントロールし、支配する力、権力かもしれません。

今日は王であるキリストの祝日です。多くの人が世俗的な権力とキリスト教を混同しています。世俗な人にとって上司に従い、自分も権力を追求したいですね。ですから今日の福音一番最初の質問は「お前がユダヤ人の王なのか？」この質問はイエス様の罪を断ずるトラップです。ローマの総督に対して、イエス様は一人です。武器を持たないし、ひとりぼっちで、軍隊もない、身边的人にも見放されていました。それでもイエス様は王ですか？という質問です。

とにかくピラトはイエスの罪を見つけることは出来ませんでした。自分の力を使って、イエス様を死刑に決めました。ピラトは分かっていました。本当の権力は武器と軍隊が必要であり、平和を保つために厳しい法律を使い、民を圧迫し、等級制度を作りました。

しかし、イエス様の王国は全く違います。権力はなく、迫害もない、命令も、強権執行もない、貧しい人たちと共に歩む王国です。

権力のしるしは独占と制服、虐殺ではない。イエス様は、権力は脆弱と失敗、奉仕することだと教えてくれました。

なぜなら、あの時イエス様の言葉は大司祭と政府を挑発するようなものでした。使徒たちはイエス様に失望し、本当の王様ではないと思いました。

「わたしは真理について証しするために生まれ、そのためにこの世に来ました」。

ギリシャの作者によれば「真理は物事の本質を発見することである」。つまり、ベールをはがすということです。

つまり、王権は真理と対抗することになります。

ピラトは世界の代表者、真理を拒否していました。イエス様を死刑に処す理由はないが、同時に釈放する勇気もない。最後まで権力を使い、イエス様を罪あるものとししました。

生活の中でも、わたしたちの周りで、多くの人が権力を求めて自分の虚栄心を満たしています。家族の中でもこの現象は起きます。「あなたの家族の中で誰が一番強いですか？」の質問にたいして、「やあ、うちの奥さんは怖い。夫に厳しいです」、このような答えもありますね。その反対もあります。

そして、会社の中でも、上にのぼるためにライバルをけなしたり、手段を使ったりと戦っていますね。色んな所で権利の為に争いが起こっています。

最後に：わたしたちはクリスチャンとして、正しいことを追求することです。同時に権力に対する自分の欲望を意識してみてください。権力は他人をコントロールすると同時に自分も傷つけてしまいます。お互いに意識して努力してみましよう。